



TITLE:

# <教室通信>学位への誘い：学位論文の保存と公開

AUTHOR(S):

引原, 隆士

---

CITATION:

引原, 隆士. <教室通信>学位への誘い：学位論文の保存と公開. Cue 2014, 32: 63-64

ISSUE DATE:

2014-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/196286>

RIGHT:

## 教室通信

## 学位への誘い／学位論文の保存と公開

京都大学図書館機構長（附属図書館長）電気電子工学科長 引 原 隆 士

大学で学問を修めたことを示す証は、言うまでもなく入学によって受け取る学生証ではなく、卒業、修了と共に授与される学位です。入学において、学部、学科、大学院はそのアドミッションポリシーに合致する学生を、個別試験で選別し、入学を許可します。しかしそれは卒業、修了を自動的に意味するものではありません。「自学自習」を唱う京都大学ですが、この前に「対話を根幹とした」という限定があります。すなわち他との議論を経て、客観的に自らを位置づけて学習することを重視しています。その学習により学問を修めた時、学位が認定されることになることは言うまでもありません。

京都大学の学位規程[1]において、京都大学が授与する学位は、学士、修士、博士、修士（専門職）となっています。それぞれの学位には専門分野が記載され、工学部であれば「学士（工学）」と現在では記されます。これまで学部、研究科において授与の審査がなされて来た学位ですが、平成24年より京都大学では、**学位プログラム**をコースワークを経て履修した者にも博士の学位が認定されることとなり、従来とは異なる博士学位の授与の形が認められることとなりました。それらが、思修館、グローバル生存学大学院連携プログラム、充実した健康長寿社会を築く総合医療開発リーダー育成プログラム、デザイン学大学院連携プログラムです。この様に、博士学位への間口を、従来の学問以外の領域に拡げる努力がなされています。その学問を定着させるのは、その学位を修めた人がこれからどういう活躍をするかに掛かっています。現電気電子工学科の卒業生が博士課程まで進学した時、博士（工学）、博士（情報学）、博士（エネルギー科学）の学位を授与されるケースが多数ですが、その評価はこれまでの修了者の、社会における活躍の蓄積によるものであることは容易に理解できます。だからこそ、その学位を習得することは、同等もしくはそれ以上の活躍を期待されるということになります。昨今では、既存大学院の学位においてもプログラムによるコースワークが重視され、社会人博士であってもコースワークを経た認定が求められています。

電気電子工学科では学士論文を電気総合館の図書室に、各大学院は修士論文を各研究科が指定する図書室や場所に保管しています。これらは一般に公開はされていません。残念ながら、昔の教員にはこれらの学位論文を教室として保存するという意識が弱く、現在では行方不明になっているものが多数あります。さらに研究室の関係者が途絶え、教員退職時に廃棄されたものなどもあります。残念でなりません。一方、博士論文は、文部科学省が規則として定める博士学位を授与する要件に、論文の印刷公表が課せられたことから、国会図書館及び附属図書館に京都大学が授与した学位論文が保管され、著者の合意があれば全文の複写も可能と言う扱いで公開されて来ました。博士論文はその学位の価値から丁寧に扱われて来たと言えます。しかし全ての学位論文について、大学が授与した以上、証拠として厳格に残すことが重要です。

さて、平成25年3月11日に、文部科学省より学位規則の一部を改正する省令が交付され、同4月1日から施行されることになりました。今回の改正により、博士の学位を授与された者は、これまでの印刷公表に代えて、インターネットを利用した公表が義務づけられました[2]。すなわち、学位取得から1年以内に、全ての博士論文が大学のリポジトリを介して世界に発信されることとなりました。工学研究科がそれに先立つこと数年、学位申請時に申請者の同意を取り、京都大学図書館機構のリポジトリ

(KURENAI [3])にて電子公開に踏み切って居りましたことから、全学的には短期間で同様の対応が完了されました。現在、著者の同意を得て過去に遡って電子公開も進められ、貴重な研究成果が人類の共通の資産としてインターネットで共用されるに至っています。また DOI の番号も付与され、資料として位置づけられています。このような学位規則を国で改訂し、電子公開を義務化した国は日本だけで、その中で京都大学も積極的に進めて来ました。博士論文の内容が衆目にさらされることを意識することは、著者自らがその新規性、独自性、有用性を改めて意識することになり、内容をより高めることにもつながります。

電気電子工学科の在学生、卒業生の皆さんには、自らで研究成果を上げ、その成果を人類の知へ還元するため、博士論文として世界へ公開して頂きたいと思います。それがだれもが必要な時に手が届く、人類のためのオープン・サイエンスの基盤となると信じています[4]。

[1] 京都大学学位規程：[http://www.kyoto-u.ac.jp/uni\\_int/kitei/reiki\\_honbun/w002RG00000103.html](http://www.kyoto-u.ac.jp/uni_int/kitei/reiki_honbun/w002RG00000103.html)

[2] 文部科学省ホームページ：[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigakuin/detail/1331790.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigakuin/detail/1331790.htm)

[3] 京都大学リポジトリ：<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/48884>

[4] マイケル ニールセン、オープンサイエンス革命，紀伊國屋書店（2013）